

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2015年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	文学部・教授	菅谷 憲興 印
研究課題	フランス第二帝政期の文学場と小説美学——フローベールを中心に	
研究期間	2015年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 472,075円 / (採択金額) 800,000円	
研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)		
<p>本研究は、フランス第二帝政期(1852-1870)の文学に特有な芸術観を、歴史的・社会的要因と美学思想史の系譜という二つの側面から検討するものである。フローベールを初めとするこの時代の作家たちは、特に「芸術の自律性」への志向において際立っていることが知られているが、本研究ではこのような文学のあり方自体をいったん当時の歴史の中に置き直してみることを試みる。具体的には、第二帝政の政治的・社会的状況と文学者のかかわりの「文学場」の問題と、また一方でロマン主義の美学がこの時代の芸術家たちに与えた影響という、いわば文学の外と内からの二重の要因を検討することで、この時代の文学の独自性をトータルに把握することを目指す。</p>		

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)
[フランス文学] [第二帝政] [美学]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、(1) 歴史・社会的な共時的視点と、(2) おもにロマン主義の美学からの影響という通時的な視点を結びつけて、フランス第二帝政期の文学の独自性を総合的に把握することを目指した。そのために、十九世紀フランス文学・フランス史にかんする文献を精査し、その成果を日本語およびフランス語で論文として発表した。さらに内外の研究者に協力を仰いで、研究会と公開講演会を開催し、後者についてはその成果を大学の紀要に掲載した。また、4月20日刊行予定(すでに校了済み)の集英社文庫『ポケットマスターピース フローベール』の巻末の「解題」を執筆し、そこに本研究で得た知見を盛り込むことにより、研究成果を広く一般の読者に伝えるべく努めた。以下に、(1)と(2)に分けて、より具体的に説明する。

(1) 研究代表者・菅谷はこれまでもフランス十九世紀の小説、特にフローベールの作品を、同時代の政治・歴史的文脈や、あるいは医学を中心とした知の言説と突き合わせながら読み解く作業を続けてきた。文学テキストとその外部との関わりを問うこのような学際的なアプローチには、歴史・思想史・科学史などの知見が必須であるが、本年もこの方向で複数の論文を発表することができた。

まず、「研究発表」の①の1に記した論文では、「分類学」的な思考が十九世紀の実証主義にいかに取り入れられたかを思想史的に整理した上で、それがフローベールの遺作『ブヴァールとペキュシェ』のなかでどのようにパロディー化されているかを示した。文化研究によくある恣意的な印象批評に陥らないよう、フローベールの草稿、特に読書ノートを精査することにより、どのような具体的なプロセスを通じて文学作品が同時代の知を取り込んでいったのかを明らかにすることができたと自負している。論文はフランス語で執筆し、フランス国立科学研究センター(CNRS)・近代テキスト草稿研究所(ITEM)の国際的にも権威あるweb雑誌に掲載した。

一方、①の2に記した論文においては、バルザックとフローベールというそれぞれ十九世紀前半と後半を代表する小説家を取り上げ、各人が同時代の科学文化と結んだ批判的関係の分析を通じて、この二人の作家の間に見られる継続性と断絶を明らかにしようと試みた。小説の言葉が他の知の諸領域に対してどのような位置を占めるべきかという重要な一点についての認識をめぐって、バルザックとフローベールにおいては「文学の自律性」への志向において大きな違いがあることが確認できた。論文は日本語で執筆し、立教大学フランス文学専修の紀要に掲載した。

また、狭義の「文学場」の問題に関しては、第二帝政におけるこの問題を扱った日本で最も優れた書物である『凡庸な芸術家の肖像—マクシム・デュ・カン論』の著者である文芸批評家・蓮實重彦についての論考を現在準備中である。論文集自体は2016年度中に出版される予定であるが、それとは独立して、デュ・カンの『文学的回想』やゴンクール兄弟の『日記』などの読解を通じて、この時代の文学者たちの「社交性(ソシアビリティ)」を解明する作業も行った。そのなかで特に明らかになったのは、しばしば1848年世代と呼ばれるフローベール、ボードレールら第二帝政期の作家たちと、ネルヴァルやゴーチエといった小ロマン派の作家たちとの意外なつながりである。この二世代の間に見られる親密さは、おそらく単なる人間関係の問題ではなく、芸術上の美学にも深くかかわってくると思われる。この問題についてはさらに掘り下げる必要があるが、近いうちに論文をものしたいと考えている。

(2) 第二帝政期の文学におけるロマン主義からの影響という問題については、これは研究代表者にとっては新しい課題でもあり、日常的に文献を読み解く作業と並行して、新たな知見を得るべく、内外の研究者の助けを借りて、いくつかの催しを行った。具体的には研究会を二回、さらに公開講演会を一回開催した。

第一回研究会(2015年9月26日、立教大学・菅谷研究室)

参加者: 山崎敦(中京大学准教授)、辻川慶子(白百合女子大学准教授)

山崎氏はフローベールの専門家であるが、十九世紀前半のフランス哲学にも造詣が深く、ヴィクトール・クーザンらの講壇哲学が第二帝政期の作家に与えた看過できない影響について報告してもらった。ネルヴァルの専門家である辻川氏からは、おもにユゴーらロマン派第一世代と小ロマン派の関係について報告してもらい、小ロマン派のさらに後に続くフローベール、ボードレール世代との関係について議論をかわした。

研究成果の概要 (つづき)

公開講演会 (2015 年 10 月 22 日、立教大学)

フランスのパリ東大学教授ジゼル・セジャンジュール氏が日本フランス語フランス文学会の招聘で来日したのにもない、本研究費を使って、立教大学で公開講演会を開催した。セジャンジュール氏はフローベールの国際的な専門家であるが、近年はロマン主義、特にミュッセについても数多くの業績を残している。「ミュッセ、有限性の抒情」と題された講演は、氏がフランスで上梓したばかりの著作のエッセンスを詰めこんだ内容豊かなものであり、日本ではまだあまり知られていないこの重要な詩人について本格的に考える絶好の機会となった。

次に、そのセジャンジュール氏の発表を受けて、コメンテーターの辻川氏からミュッセを小ロマン派全体の文脈に位置づける趣旨の発表をしていただいた。特に氏が専門とするネルヴァルとミュッセを比較することにより、一つの世代の共通点を浮き上がらせつつ、セジャンジュール氏の現代的な解釈とはまた違った、むしろ同時代のコンテクストを重視する立場からの読解が提示されたことは貴重である。

当日は平日の夜であったにもかかわらず、学外者も含む 40 名以上の聴衆が参加した。質疑応答の時間も活発な議論がかかわされ、全体してきわめて刺激的な講演会だったといえる。なお、本講演会の成果は、セジャンジュール氏、辻川氏による論文として、立教大学フランス文学専修の紀要の最新号に掲載した。

第二回研究会 (2015 年 3 月 5 日、立教大学・菅谷研究室、ただし本研究の予算は使用せず)

参加者：山崎敦 (中京大学准教授)、大学院生数名 (立教大学、東京大学、早稲田大学)

文学と法律という観点から、十九世紀初頭に成立した「ナポレオン法典」とフローベールの作品、特に『ボヴァリー夫人』との関わりについて考察した。十九世紀フランスの作家たちのほとんどが法学部出身であることの意味は決して小さくなく、当時流行した「姦通小説」の文化的背景を把握するためにも、フランス革命後の市民社会の基盤となった法律、特に民法典に対する理解は欠かせないことが明らかになった。

フランス・ロマン主義の研究は、日本においてはいまだ相対的に立ち遅れているが、それでも近年若手の研究者を中心に重要な業績が発表され始めている。特にポール・ベニシュのロマン主義四部作の第一巻『作家の聖別』の邦訳が、原著刊行 (1973 年) より 40 年以上経ってようやく出版されたことの意味は大きい。先に述べた公開講演会の講演者の一人でもある辻川慶子氏ら四名の若手研究者によって訳されたこの大著は、文学運動としてのロマン主義を同時代の広い思潮、それも政治や宗教の流れと突き合わせて理解するものであり、文学研究を思想史研究と結びつけた決定的な著作である。本研究の代表者も、この訳書の書評を日本フランス語フランス文学会の機関誌に発表した。そこでベニシュとロラン・バルトの歴史観を比較して、十九世紀中葉に歴史の切断面を見るかどうかという問題提起を行った。『零度のエクリチュール』のバルトや『家の馬鹿息子』第三巻のサルトルのように、第二帝政期の作家たちの先端的な試みに文学的思考のリミットを見て取るべきか？あるいはベニシュのようにシャトーブリアンやユゴーらロマン主義第一世代においてすでに、世紀後半に展開される諸問題の萌芽は含まれていたと見るべきか？現在フランスの文学研究においてもアクチュアルになっているこの問題については、今後も具体的な文学史的検討を積み重ねて考察していきたい。

以上、一年間という短い期間ではあるが、発表した業績の数からみても十分な成果をあげることができたと思われる。また、フランス第二帝政期の文学を多角的に検討する作業は今後も続けていくつもりであり、特にロマン主義との関連については共同研究を行う下地を作ることができたと考えている。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①

1. Norioki Sugaya, « Classer la vie : la taxinomie aux prises avec le corps dans le dossier médical de *Bouvard et Pécuchet* », *Flaubert. Revue critique et génétique* [en ligne], 13, 2015.6, URL : <http://flaubert.revues.org/2428>.

2. 菅谷憲興、「十九世紀文学と科学文化 —バルザックとフローベールを例に—」、『立教大学フランス文学』、45、2016、pp.33-42。

3. Gisèle Séginger, « Musset : un lyrisme de la finitude », 『立教大学フランス文学』、45、2016、pp.127-142。(③の公開講演会をもとにした原稿)

4. Keiko Tsujikawa, « La “parodie du sublime” : Musset et le romantisme », 『立教大学フランス文学』、45、2016、pp.143-152。(③の公開講演会をもとにした原稿)

②

『ポケットマスターピース 07 フローベール』、堀江敏幸編、菅谷憲興編集協力、集英社文庫、2016、842p。(『ブヴァールとペキュシェ』の翻訳 pp.547-719 と「作品解題」、「フローベール著作目録」、「フローベール主要文献案内」、「フローベール年譜」 pp.792-842 を担当)

③

公開講演会「フランス・ロマン主義再考 *Repenser le romantisme français*」、講師：ジゼル・セジャンジュール (パリ東大学)、辻川慶子 (白百合女子大学)、司会：菅谷憲興、フランス語通訳あり、2015年10月22日、立教大学池袋キャンパス・マキムホール M302 教室。

④

菅谷憲興、「ポール・ベニシュ『作家の聖別 フランス・ロマン主義 I』書評」、『cahier』、17、日本フランス語フランス文学会、2016.3、pp.31-32。